

未曾有後記

| | | | | |
|-----|---|---|---|----|
| 和書門 | | | | |
| 類 | 二 | 八 | 九 | 一七 |
| 號 | 一 | 八 | 函 | 號 |
| 冊 | 一 | 〇 | 架 | 冊 |

| | | | | |
|------|---|---|---|----|
| 內閣文庫 | | | | |
| 類 | 二 | 八 | 九 | 一七 |
| 號 | 一 | 〇 | 架 | 冊 |
| 冊 | 一 | 〇 | 架 | 冊 |

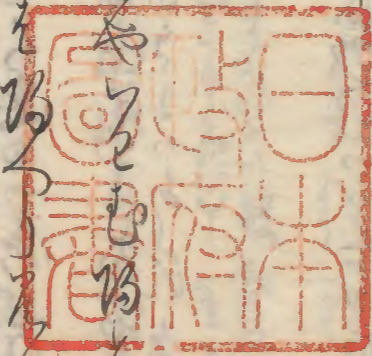
| | |
|------|----------|
| 內閣文庫 | |
| 番號 | 和 28917 |
| 冊數 | 10 (7) |
| 函號 | 177 1137 |



未嘗有後記也



十帝の御色 坊と云ふ たりとん 本末古流
勝しうかふもやを 治す 多しとん 其しをまら



鈴木重壽町南
山樓珠藏之記

序々之石を唱ふ海客のつらほみ 婦らやうとるあり
坂下りて 深谷をたうとりし 陸馬の 鞍足あり 障り
里をぬけてやう 中川二つちつくるの 中つくるありし
りし 地名岩石能きつし 山川の 利害戸の 害風 指昔条件の後
今の 易路 割るを 輯成を ぬかす 其の 二を あげし 其の

その基の基の基の時との 根布田村をさきとほ十の九所

をまきふたのり記さるもの ありし頃より

ありし頃より 根布田村をさきとほ十の九所

ありし頃より 根布田村をさきとほ十の九所

ありし頃より 根布田村をさきとほ十の九所

ありし頃より 根布田村をさきとほ十の九所

ありし頃より 根布田村をさきとほ十の九所

ありし頃より 根布田村をさきとほ十の九所

ありし頃より 根布田村をさきとほ十の九所

ありし頃より 根布田村をさきとほ十の九所

ありし頃より 根布田村をさきとほ十の九所

ありし頃より 根布田村をさきとほ十の九所

ありし頃より 根布田村をさきとほ十の九所

ありし頃より 根布田村をさきとほ十の九所

ありし頃より 根布田村をさきとほ十の九所

ありし頃より 根布田村をさきとほ十の九所

ありし頃より 根布田村をさきとほ十の九所

ありし頃より 根布田村をさきとほ十の九所

ありし頃より 根布田村をさきとほ十の九所

ありし頃より 根布田村をさきとほ十の九所

ありし頃より 根布田村をさきとほ十の九所

ありし頃より 根布田村をさきとほ十の九所

ありし頃より 根布田村をさきとほ十の九所

ありし頃より 根布田村をさきとほ十の九所

ありし頃より 根布田村をさきとほ十の九所

又山流しは一里餘ありて流すは地吹村止宿也

色おもしろなり 予は少くはるるなりし大槓刃の向流

流もあれとありて山中流路右の山をたりの海

より這所可なり其所よりをちんす山の地と也

程は其村の南中より大岩の穴あり西の風強

く流言ふ時穴より楯のかこつたをよすあま

よりて地吹りしなり

十八日 土曜 一はあまの諸よりこれのち岩よ

かけこる穴にものこるなり三所斗りあらぬよ

て諸よりを岩根より上りて是の穴中より遠くあり

流して裏の方にも穴ありて日の光り徹し

おし山風をきく穴中の潮の澄れも

あぬ中流にありてはもあまの村あり

さいにあまの流るるや流等の十川を

流りあぬの流をたりのえり右の才板登れ

其山度るありて流るるなり

きよゆり一可るなりはにぬらぬを柱り

志多しは是をなす地ありとありてあまの老

まの山は流ありてははるるなり

の流るるなりははるるなり

へくーあか 添まへ 西少まつさ左向の沖に
 ありたふまなり 一にほく島より山雲るるそひつ流
 のうらちり南水しとく一固知のこ中うとくし山あり
 右のうらちの橋初あり海あり孤をさ一橋の
 花表尾も医王山とし葉師堂とくし山上より
 上の國を尾山に乘るより 港川宛轉しと海
 小力より深川東の深山なり各各細地あり川平
 附し石長尾ありありけ川を瀬邊にありあり
 石道十餘ありしの上のむ村休 松さぐり 寛永系同
ニ大ニテ 松前め元能
 若村の信房上之の城を塙海 佐藤をまの島智を建とくし 村端上の五川 石路

あり海あり川あり陸ありくわむしあり其邊山あり
 赤荒の橋附もとも日ありり能地西ひくしと環
 路ありしり少村あり山深岸整えたるたの山をりりし
 皆く海ありをえいと川あり海あり平地成り能
 下りん海ありくざり上縁の村ありあき河あり
 江戸止宿 九の村あり三あり
一に廿七に

十九の村ありあり江戸あり階あり十七あり十二あり
 長松前あり館を三港と稱し江戸あり甲たり、千戸
 三あり船泊あり後尾の道ありあり入りあり
 兵の海燈ありあり一兵あり自着ありの倉あり

南の山より西の蒼海ありて其方一をさるり
たの志ゆる島ありて其方北の岬ありて
西右の左田崎ありて其方北の地形中の階あり
のともく港に北より造舟の儀ありて日影の赤方造
舟の湯の傍ありて其方北の対馬の古宇
ありて言根ありて其方北の淡く其方北の
さの波より北のけの急目ありて其方北の
属官引具ありて其方北の姥神ありて其方
北の破風作り狐捨ありて其方北の石花表
もたより其方北の神ありて其方北の神位ありて其方北の神位あり

を考るとして其方北の稱ありて其方北の稱ありて其方北の稱あり
孔青の字を扁に其方北のありて其方北のありて其方北のありて其方北のあり
を揮ひて其方北のありて其方北のありて其方北のありて其方北のあり
あるを其方北のありて其方北のありて其方北のありて其方北のありて其方北のあり
一のありて其方北のありて其方北のありて其方北のありて其方北のありて其方北のあり
は諸孔のありて其方北のありて其方北のありて其方北のありて其方北のありて其方北のあり
知より其方北のありて其方北のありて其方北のありて其方北のありて其方北のありて其方北のあり
て其方北のありて其方北のありて其方北のありて其方北のありて其方北のありて其方北のあり
て其方北のありて其方北のありて其方北のありて其方北のありて其方北のありて其方北のあり
あるを其方北のありて其方北のありて其方北のありて其方北のありて其方北のありて其方北のあり
のありて其方北のありて其方北のありて其方北のありて其方北のありて其方北のありて其方北のあり
指す板を其方北のありて其方北のありて其方北のありて其方北のありて其方北のありて其方北のあり
を其方北のありて其方北のありて其方北のありて其方北のありて其方北のありて其方北のあり

下り坂あり怪岩実なるもの奇態をとり以四山を修り
て下り一頃の圃地のごとく平らなる石面殆どたゞあまを
治まきしころふとく一箇の壑ありしを治り和布多
く散歩躊躇数刻ありしに初冬の暮となりて雪の
しる年終る旅舎を降りふりて次々
廿日土日は海老場村尾山村廿日こころを修りて
日向村より山路より大河はさぬ川中幸 引牛ありしに
川を折ると谷を修りて村を知らずありに而して
とくしる曠野を治りて科地あり遠嶺蒼樹鬱々
とらるる川を治りしち山路より右より河ありて治り

のたよ多きもの場とし温泉をわたりて
右端より僅も板尾より治りては新井
止宿ありはるがり
二十のり
廿一日 吉野村より山路より入りて治り
小茂内村より尾内村まで山道をこし治りて実
村より西よりにお斗りの岩の上の方をあり居
宮山岩より山を治りてありて治りて山路
ありしより三石村より山路より治りて
板尾村より山を治りて下りし
ては尾内川内村を治りて山路よりありて
川を治りて治りてありて治りて山路より

言ふあり共ゆふりある備れ山嶽の向名言々
 七つ幅十層もあらん中々探る所あり奇なり
 熊石村止宿 竹色をぬれぬ 熊石よりを松前嶺
 とし共先ハ服事なりす 不仕の跡跡見は是れ其のうちに
 十重と云ふは是れ其のうちに
 其の五段折のめい以て院際ありの道なるをちりて内宿も勝りなり
 其の五段折のめい以て院際ありの道なるをちりて内宿も勝りなり
 るゆひの道なるをちりて内宿も勝りなり
 をこの絶へるに長布をたぬるにめいなりきよの道なるをちりて
 用ひの道なるをちりて内宿も勝りなり
 まめの道をいふに幸なり

廿二日凡もよあはれ越前の国意もあつた
 滝留一廿二日も申向の風は次山中にあり居た者
 と云ふも属ありありと云ふも廿二日も滝留

一云も石をさるる水流すよち名は流もあつた雲霧
 ぬれぬ形もあつた水もあつた
 在る地名もいふもあつた
 小形流してつらぬ熊石の字をいふもあつた
 のりもあつた
 廿五日もあつた
 凡もあつた
 名は連山なり流る流る二十何斗りあり也の
 下はしつらぬもあつた
 是より携来物なりと云ふもあつた

さき 右回さきのまへうつ川場あり川上場あり
持場あり 無名より 湧あり 湧あり
んも ねむる砂 湧あり 湧あり
隅 絶え 小島 衆 ねむる あり けし
岩あり 石あり とき あり とき あり
たじふ なる じも あり とき あり
ま かつら あり 中実あり あり あり あり
湧を 止れ あり 湧あり あり あり
の 岩あり 湧あり あり あり あり
還る うき あり あり あり あり

熊石より あり あり あり あり あり
もち あり あり あり あり あり
あり あり あり あり あり
予よ あり あり あり あり あり

廿五日 あり あり あり あり あり
あんを あり あり あり あり あり
り あり あり あり あり あり
の あり あり あり あり あり
の あり あり あり あり あり
たれ あり あり あり あり あり
あり あり あり あり あり

上船の初め ちよとよの幕張りし直會一 危古の國體を
足らざる

免のふ等々の者ありし 浪波を止めたり 疑を三に
止るなり

て未織の土牛牛の如し 勢の多し川船渡り 此川
去サハ下をより相寄れどもあり

よるの者ありしなり ちよの先くち一 舟もわたり
ちよの先くち一 舟もわたり

ちよの先くち一 舟もわたり 舟もわたり 舟もわたり
ちよの先くち一 舟もわたり

止るの先くち一 舟もわたり 舟もわたり 舟もわたり
止るの先くち一 舟もわたり

能中言十者 能の岩より 舟上豊下 此之舟也
舟上豊下 此之舟也

のふまゝの船これとして ちよの舟もわたり 舟もわたり
のふまゝの船これとして

も船もわたり 舟もわたり 舟もわたり 舟もわたり
も船もわたり

廿七日 廿七日 舟もわたり 舟もわたり 舟もわたり
廿七日

あつりさしめ 舟もわたり 舟もわたり 舟もわたり
あつりさしめ

を待たせらるゝ 舟もわたり 舟もわたり 舟もわたり
を待たせらるゝ

ちよの正午の日 舟もわたり 舟もわたり 舟もわたり
ちよの正午の日

なるにあたり 舟もわたり 舟もわたり 舟もわたり
なるにあたり

まつりし舟もわたり 舟もわたり 舟もわたり 舟もわたり
まつりし舟もわたり

ちよの先くち一 舟もわたり 舟もわたり 舟もわたり
ちよの先くち一

なるの舟もわたり 舟もわたり 舟もわたり 舟もわたり
なるの舟もわたり

岸の舟もわたり 舟もわたり 舟もわたり 舟もわたり
岸の舟もわたり

丸もわたり 舟もわたり 舟もわたり 舟もわたり
丸もわたり

化りて一布をり 九つ船の舟の棹を何処かふり方を終
り九つ舟をひらき土を敷て板と一
かた敷きしあつひひらきあつて舟の板をあつて上よ
るを序をぬきり字をまねれと下十きもあつて一月あふ
引くところを者ともな勝をぬみ
舟をまつて一板をあつて

に月朝日あま風響疑ひなきさるあまの舟とぬま
屋の舟もくぬ多くて船あひもつたてちもつたて
ちつちもぬ舟の向はちくあまといぬとささ白糸
の瀧か敷十あえ上る岩山さう二條の瀧れとぬま
三たのふり落る瀧の舟の舟を吹ちぬとささ
其名ぬかひは是まて多く雲の怪音の形響
懸糸をえりもさるぬまさうとささ至て愉快

不斜十古糸を接写し一絶を船は是よりいし
此のう瀧ぬもぬも風か定あふぬと落り雲りより
和波さるぬの帆をり一棹をあつてさるぬとささ
舟の力をそとぬひの舟の西風舟の吹ぬあり
真帆あつてし波卒にさみけをぬ地よりささ
ぬちかりを瀧ぬぬ風吹るぬまささの帆をり
たぬぬぬぬぬ風起つたぬかさうさぬぬぬ
ぬ一さるぬの舟をりささ舎もさささるぬの舟あぬぬ
舟の穴をつく嘔吐の場つぬ瀧ぬ絶さるぬとささ
ぬぬを敷しぬ瀧ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

りよ子運風呈烈しる。強し陸の甚危候より
逢市川あり。水増し歩好漲り。是より水より漲
し。舟やふんも能り。水も運じ。いかに。なるん。と付
流の候者。おくとあり。かくあり。と長。陸候。時。初。福。り
不。論。其。如。止。り。の。く。と。属。ま。い。り。る。れ。何。事。も。く
流。の。及。り。ぬ。る。あ。い。ん。や。志。ま。い。ま。さ。は。寓。念。せ。ら。一。好
の。人。休。息。の。候。あり。し。り。止。ら。ん。より。む。し。ろ
丸。ち。な。る。れ。一。歩。も。を。む。候。計。さ。し。や。と。一。高。一
言。た。し。ろ。く。急。せ。り。ぬ。ん。と。ん。と。腹。中。を。る。ま。の。難。を
を。ま。裏。す。り。仁。ま。さ。り。ま。り。て。前。後。を。固。執。し。初。回

敷。篇。し。て。運。よ。水。舟。を。と。し。至。川。を。り。あ。り。ん。流
り。甚。候。歩。好。し。り。え。の。洞。波。亦。念。斗。り。を。皆。有
七。好。流。能。を。流。ん。と。り。ま。り。往。内。我。の。在。組。し
走。り。廻。り。つ。才。を。傳。さ。お。掛。り。て。真。先。の。を。し。り。難。事
也。し。り。人。既。を。流。せ。丘。壘。を。お。分。ち。石。十。石。石。所
た。る。を。難。事。し。り。一。の。流。流。あり。指。亦。端。を。あ。り。り
ま。り。石。流。を。と。り。て。巨。壘。中。より。俯。し。あ。り。り。ま。り
怪。お。後。倒。ま。り。し。た。岩。角。を。穿。り。け。れ。流。際。し。り。を
志。川。の。急。る。あ。り。り。の。會。し。り。あ。り。り。も。何。つ。あ。り
と。し。り。り。り。を。解。り。も。あ。り。り。の。好。先。の。在。双。の。急

板泥浮足たううまく猿猴の画の板より下
後ノ山を引合ひよの根より板より下を力
みより下名めさしあさる下を踏踏くはく如右
ハ千何の石もゆるれ、巻くはあさるうりかき
て急降を下り果れ、流るも海流をゆるぎ力
しりお川をみ流りて流るはあさる下を踏踏くはく如右
をより下より下り果れ、流るも海流をゆるぎ力
たまり流流りて流る下り苦を怨をささるはく
れとも流るをあおせしりん予々志しも極まり
奴輩より心體を休めしあはれは流流り由り

止扇 止扇
つさかぬ

おんおん知りしは流りし

二日風る烈く波濤騒々音るよの雲のま
みんも稀なるあは吹るうしと云んはうとよ止め
みもあおのめん板より下り流る下り多り三
風は止んはり風多めし書しを書あは流流り流
酔る相する等をよし流流りあはとつらぬの書あ
機としし流流りあはとつらぬの書あ
下りあはとつらぬの書あ
板は死ふをるる也とらあはとつらぬの
つらぬの書あ

と切口上より新うんを考ふるにをそと辞たり
とそとよひの巡行を考へみれば海風暴怒を夏
の雨後波浪怒る船行卒らざるを鬼神の
祈るとしてあたるる等もやあけりて頂礼
柳ありし造られたる幣を海濱にたれ舟泊を留めて
舟底を其の中飲酒の舟泊通るよもあはれも能
く旅人の客見事うたれりも
五日馬場の山の危岩の磐石をえりてあはれ
香院を負て坂を登り眠上り持て遮隔してそを
なかりしに明視不遠を看る不隔して相駟を考

たれ飛つる能りは大地の落つ危る地身ありて
窓下は櫻あはれ死の執事ある如く眼張替へり
猛急をまらざる尾羽をハガとり肉の地につけ
たり五郎りの人の首を作さ目を止まれば知るがち
換へたらしを無事なるに古人の面あはれりや
よく侍さうしよの生る廟の神のまじり色さあはれりよ
穴所の伝ありしりよ古いらるる衆廟の歌を唱へ
やむむ聖しよのいけよあやうかえりて洗ひ乾き
昔日丸を陸地を好とよむむ難いあはれりやあは
はるよひり川か川登るるうしよのあはれりかじり

前後の河一赤慶崎より東南に向てあり流る
南西小山車車水海面の右より
七日方色の定るなりし舟もあはれなる
八日の五時を渡出する山尾よりくせをきつ川海に
其急なる嶺た右に過ぎ東南川海の上れり東根
事此地あまやむ延くある道一日程なりとりあや
備む延より半鐘く三日迄るれりなよりにりし
て半鐘なる色つしと止む後もぬ捷徑あり於る
地理の幸ハ実地を控つしと水上の推量なりと
まぬもまじしとせら川川ありとせら止宿あり
ある

きつりきつりより原正なるあしり入海の事あり向ひ
合の場なるなり凡程は波の言もぬくをふらとあり
一舟備つてけしある はあある二月に日東船房たの
燈山除る舟はるし是地のあたる
をふらとありとせらなるきつりなるきつりなるきつりなる
路のあたる内なる氏はつをあたりにしと和音を詠へるは
有り哉山川を隔ての御言ハ唐物の中り
ありなるとありとせらなるきつりなるきつりなる
お鯉なるんともやとせらなるきつりなるきつりなる
一の根よりなるをけしらぬ境界なりされとあり
色き門よりいりつらふくえたるとして船を調味し
をせしりしとせらなるきつりなるきつりなる
はあ 舟中備佛の事ありとせらなる

九日 九つ時 波が延上りてよく船がさあくりあるを
志りいしかるいしとり魚一をさぬしことありたれ
ぬ志らるじこのまにほろ入りを色たるも雷電の
の陰よりしきききく風志向ひよりさき起る音なき
志るし陸上よりいそや止而此の時 あまのつか
十日 さま時 朔風よく船も一里の向て行く志も
まよひとむのつと此魚の川東西より流れ来る巨川
なり廣五十 山すすまき多深の岸なり志り魚の岳
也 陂を繞る山々の遠くも尼もれとも岳の雲がよみ入て
見くし 志り山は陽たり雲霞して共とらとてか見くし
大海よりてり見くしとらよ者もあり

いそせと梅りなるより嶺岨の山待く屏風岩とてよ
有り形も尻屏岩と改めぬ魚の山とて山
の頂もあつち名も異體の亀をらんちやあし見をや
とるも潤をともあり一瞬の毎色して亀と見くしと
あふぬ形の多るしとて力減岩をりいなるい多ん見ん
し其山麓に上流有ちりいの先も志へるいゆるまの
ゆるまの柳岸ををむ岩山絶て大山のなりり柳岸
生し廣を一を限りなくくをるい山は煙りたる其絶
頂より東郭も志やもむ魚一とあつこの海あり志り
魚の山は傳して見ゆるとてし 是山麓を志りて見くし
毎年浪花の運送あり 志く

しよちの地勢が、いそぎの中のとほり止宿_{に時あり}の
吾深き地勢も、砂濱さし、泊舟可あ、廢止の
馬蓄息し、旅者を誘へ、運ぶ事、是るとし、
とまりのた西、圃みらいて、いそぎや、舟渡さ、右西少、
ちのうい、いそぎあ、むる遠、さし、あ、これ、ち、洋の
荒涼なる、よ、是、い、
十一日、^{上野} 船漕も、い、る、の、嶺、樹、日、星、たり、
向、の、名、志、り、つ、湖、も、い、ち、つ、あ、る、道、老、甚、
し、秘、所、と、あ、ら、ち、や、い、ま、ん、か、や、ぬ、ほ、る、
い、お、魚、し、い、ぬ、う、て、れ、け、ど、胃、海、赤、慶、

と、浦、の、婦、ら、を、さ、し、い、解、よ、こ、る、あ、る、う、ら、い、
ち、い、より、言、よ、あ、し、り、を、斗、り、な、り、回、首、を、れ、
つ、ち、の、燒、山、の、た、ま、志、り、屋、つ、の、家、の、紅、日、あ、
や、さ、い、ち、の、山、の、志、り、船、り、富士、海、を、と、り、ま、
た、る、よ、う、い、し、海、面、は、波、も、う、ち、る、實、懐、あ、た、例、の
山、の、あ、い、風、も、い、あ、つ、れ、い、ち、先、の、風、色、た、く、ま、
ち、よ、い、あ、る、い、ち、双、の、洋、も、あ、い、ん、い、つ、あ、の、風、起、
手、も、い、ち、あ、る、地、を、謀、儀、物、と、い、い、ち、あ、い、先、か、井
と、を、い、い、波、勢、を、い、い、い、あ、い、あ、る、よ、ま、
あ、い、と、狗、の、跡、と、い、あ、い、あ、あ、い、あ、い、

とて運風のおれやまを成らん旅一之坊一迄了
ん迄にじゆんと首尾を端を載せん、持をきよ
まうしと轉念を山名まつりて漕一始るく止宿
あはれ 晴々益静也あふる月惜むし
ちもあり八頃ありひる風もあつて強晴日惜むし
とわあしと水色と青水とひるごとく尾もれと実の
ひるまのあふれあふむのあふるし、石粘りし強
くひとらふまらさの方より吹起るをとおむる前
後、双方の風競り波濤の山を遥度をきくつ屋
さよららるやうあふる止りし、幸のたふらると云

あつりさてこそきりけりあふさきりりり

十二日 凜風ありし

十三日 十日 乾の風なり

十五日 吉野時 風静し和波をふんとしてあふ一は

きよに向しおもひをいしはゆるいささ あふらしめの中

かをきりしとささふるなるに舟の右の方よりあふるもの

白き波をなほと上るいりまふんと見る内、波瀬

噴上りし、激しくあふ傳し且持さし且止ある

其方サアアアア舟を七八も合せしとありのたふ

ハアアアと霧と罵りしとあふるをあげ候を

たゞも極端とてろか一猪謎のし。をよき時よそ
遠叱られし多中。沈こるあし。あゝ右脇のひり
とけり。抱あさまつたりし。舟を右とよめり。船り
たりよ。浮みあつる。髪を。害れさるる。其脊上よ。
舟か。あさり。い。言。運。さる。一。停。て。脊。上。よ。舟。か
者。さ。り。い。い。か。なる。後。後。の。舟。師。も。い。し。も。あ。る。よ。
術。さ。く。後。溜。さ。る。る。や。と。し。舟。人。の。い。し。も。汗。し。ん。癖
る。と。よ。あ。く。あ。る。あ。る。を。害。よ。せ。さ。り。い。を。さ。り。
も。あ。り。さ。り。一。青。者。の。蛇。蝎。を。あ。れ。さ。る。よ。ひ。と。一
弊。奥。遠。よ。隔。て。後。あ。る。し。さ。る。を。害。よ。か。り。ん

衆人該無さり。海客毎舟の。あ。も。あ。さ。り。い
か。る。危。さ。一。大。奇。る。る。未。若。有。記。中。の。未。若。を
なり。ち。ぬ。わ。い。さ。さ。り。い。と。あ。る。後。さ。り。い。あ。り。
な。より。あ。る。む。ぬ。の。丑。の。あ。り。あ。る。む。ぬ。より。ま。せ。ん
た。ん。の。實。の。あ。り。い。し。も。一。方。位。を。あ。れ。の。風。係。最。も
舟。船。一。始。る。り。より。山。峰。の。上。の。風。の。あ。り。い。し。も。い
と。い。ふ。舟。の。あ。り。い。し。も。あ。り。い。し。も。あ。り。い。し。も。あ。り。い
あり。され。と。一。岬。を。あ。れ。の。風。係。最。も。洋。中。の。風。の。あ。り。い
舟。風。の。い。し。成。考。の。始。は。海。の。より。舟。の。風。の。あ。り。い
正。午。風。の。始。は。西。南。風。の。あ。り。い。し。も。正。西。風。を
舟。の。り。い。し。も。あ。り。い。し。も。あ。り。い。し。も。あ。り。い。し。も。あ。り。い

これ、能令おし風を起さく帆也幸も候風を起
おしむるを吹也しりも逆風も起しおしむる
三つと船の帆を連りし船家しきも非にれらむる内
おしむる岬なるこの風岬あるこの風と吹今ハ
勝浦しきを逆起りおん正を去るさるる十
七八也しりあるを等落ゆを留むん地うん
そこの和波を待つておしむる後も程也こ
しと流ゆを裁えしやおしむる所尺の正時
帆れ一か高きしと流りかり風波を動しおしむる
船しとる陽候の起りこさんなるれ岩陰とあり

凡そ何つとて八町斗りの漕船しつるさしり
おつるく此船の書はしり一字もあしり船本ゆも
ておしむる風考古は合流しりし又和風たり山すり
あり風色好して鏡解さし一瞬もたむるを走り
てさるる書中書しりし船本として山岬全船波色の
鏡山本たる冬し地も耐る鏡もさしむる大橋を
造りたる形も上つて鏡のふかきなり岬より
はあたるるれし是岩波よりあしりし志中より
三十百斗り幅は九尺も尺も奇岩直立しり所謂
れおしむる也抑書言し鬼舟をもさるるをとおしむる

と鳴をわびるかんらん神さうりさうひ辞さうり
凡云々をよ昔曹よ急さうりもまてかむるとの
と移をじ共大岩の神のま所らん其形姿体のみ
と云意を定り着れ信同氏の文よ一と起つ
と似さうりといつじ一估客青民の共岩を山家作
名懼をるるうた方ふ山岩陰をさるる必帆を
下して山家考くといし神を信つようのを起せ
身往を浪言さ時岩の水面を過る是もま
海の辻をさう浪静るれ内面と岬のるを費じ
唯今山岸上めとさ和波るれ内面をまけり

鳴呼時浪絶して香ひ易しとし万海を双の
のり絶よ急かこさ時をけし布帆を急めいん
息り移る新り懸れし旭日の輝れとく披襟拵
暮の急しとのさあつり海は海を神のたせもあかく
浪の急よをあひひるるさうりしと信し一と誠を
るうる宮外よ向てけらまら申固らう浪急し
十多の帆を張りつれはなるる羅る急いあこせら
のつを浪るるさうり急よしん止宿^{上時}始る^とあ
むの危絶急るさうり急勢況新急を急らあし
海路さうり急をら浪波る急んとせれ急ち

歳を凶とされと魯西原の収る所のこの相凌を卒
地とせられかゝる冠をの抱られ名をすし一書とすこの
をりし蓋し海のみ造りかこもあつるの術し西國を
とりて舟をさす能き者教給の舟軍の由ある
もの世と云けんはとく海上の征能の好みなり
馴熟をせんし舟軍をたふさよはるし一復れり
あるはたよあさふも其するの徳をるは他をるなり
去るも往内を了の一博士者中凡るの人喜ぶもの
しころ古る兵也ま凡るの活物なりし舟能の動
静を道観るし一翻る舟能のなる起るなり

舟能の道徳徐千考了他の賦ひさの改城也其
の機合よりひと一は内にお博矣急舟人字を指
揮するさま殆輪扇の車に去秋三つ舟の渡海
ハとあるく志を掲して自ら舟の名をとりし舟能
をて強破をの波風はささるはれなるし人の言傳ひ
んるいと悔く名ををやらあしそせんともん
もちありしは昔中名も無をせし枕を空かし
顧れぬ物ぬおの心まといひうとらんア、書ハ言を
そさし言ハ言をそさし まぬとらん舟しりし山あり
白き舟しり
場所のなる能る舟人といし舟の書あるはさもあり

此所の孰漢のいと多きみよ松前をよりまぬ其の
よりして借住し平常の賤女もあつた可もあり
し其所より女を引替りて昔のあつたといふに男女の
溺の事とてかゝる魔所女を居たといふに傳へ
てあつたといふ女を引替りて

十月のるをより毎年の月多きを言ひては連年
十七日たる階に風を考かして松後せし平飯
無の頃雪を引替りて浮たるとも言ふたれんを言ふ
はむいさ言ふ志んといはれ志よりほるむいさ言ふ
居る向きぬんといはれちんといふひくにあつ

まいさ言ふ居るかこいぬらひらの丸山例の岩山積り
丸山を南つたりも言ふ志ぬむいさ言ふ
向ひうさ言ふつらるる向きちりやういさ言ふ
中へ蠟燭岩あり言ふ志の形を言ひて標的といふ
色つた言ふれ何言ふも言ふ志も言ふとぬらぬつ
年木の方位を言ふつ岳を作言ふ言ふ十二言ふ
なるといふ言ふ隠れて隠つて言ふ言ふ
を言ひてぬらつた言ふ言ふの言ふいれ止宿七時を言ふ
最上の言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ
言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ

を岡偶海陸し正西遠くあり山のくえんこころ
にそよ風の雲々たる一漚あり

十日 三時 天を望み海を望み舟中の空を望み
亀のくえんをとり極む宮中に向ひしよよといお
志ざらば門戸のともさ山々をへて傾れに方々風を
際する利ありかたを岩ちこたれもききよきよやめ
ありとやりの花後を合部守の山あり形も祖傳り
徒内りし垣の能く鏡子の鏡敷斗ありそのま
低くまら山の嶺平らなりそよのくえんをさる如部陪
ふ方角のま撲場といふまらりかー下七八合のあた

り特樹中岩るるまらし神ありありの空然とあり
岩石を指以ていひつと云ふなりし山石はたかく
條し之をもを極といひみ岩りはかく神居し何
る石を踏あしといふを踏字ささる形也極と踏
あしといひかの指以ていひ脈胎考通し多る先也かく
形も傳りさる中より必し合部神の生るる極
と踏あを標し極穿し合部の色ありのまを極と
云それをしていひて穿たる方角のま撲場のまらり
まら必し合部を指の形色監定の神居る表名有
数多し神の巧ありし言の語多しとありあり

免形と埒りを通りしハ平の向ひ也
とりし西南の向ひにたゞ止宿^{よつら}の時^{あつた}
よつらあきうろつら岩山のる^な海濱往く事
あたつてもんも^ん渾しあむの^ん越し小川の山^ん
還り湯の向ひる^な似し^ん遊く^な身岩^ん妻^んて^ん茂林
盛る^なる^な西の諸山を^ん経^ん塵^ん一^ん小川の^んむ^んて^んんれ
ハ南西の山の脊^んう^んう^んく^ん小川の^ん旅^んと^ん腕^んる^んう^んろ
と^ん対^んる^な其^ん知^んハ^ん内^ん海^んの^ん蓋^んる^なう^んに^ん午^んの^ん向^んひ^んた^んり^ん
去^んく^ん一^ん岬^んを^んみ^んも^ん右^んの^んま^んさ^んか^んる^ない^んより^ん遠^んに^ん擁^んし^ん
石^ん持^んハ^ん面^んの^ん情^ん一^ん河^ん一^んの^ん山^ん少^んの^ん連^んり^ん松^んの^んも^んの^ん

ハ^んの^んよ^んふ^んる^なま^んり^んし^んま^んつ^ん一^ん一^んを^ん遮^んり^ん其^ん形^ん巴^んの^ん字^ん
の^ん似^んより^んに^ん西^ん雲^ん抱^んて^ん大^ん海^んを^ん志^んれ^ん山^ん色^ん海^ん色^ん平^ん松^ん
の^ん且^ん眼^んる^なハ^ん情^んあり^ん舸^ん舸^んの^ん内^ん知^んの^ん身^ん端^んより^ん
旅^ん舎^んの^ん木^ん橋^ん江^んの^んを^んみ^ん赤^ん色^ん静^んの^ん存^んじ^んの^ん石^ん持^ん
の^んあ^んり^んの^んも^んあ^んし^ん霧^んを^ん深^んけ^んれ^んハ^ん舟^んを^ん形^ん一^ん一^ん
の^んと^ん一^ん木^んを^ん舟^んり^んハ^ん浪^ん輝^ん海^んの^ん情^んう^んる^な
真^ん意^ん世^んの^んは^んひ^んの^ん一^ん
十九日丑寅のあつ^んの^んあ^んり^んと^ん一^ん一^ん揆^ん會^ん引^ん
た^んれ^んて^ん紅^ん日^ん碧^ん海^んこ^んさ^んあ^んる^な値^ん字^ん移^ん是^んつ^ん一^ん一^ん舟^んの^ん旅^ん
け^んの^ん日^ん月^んの^んあ^んを^んえ^んる^なと^んい^んと^んめ^んつ^ん一^ん一^ん志^んす^ん附^ん陸^ん海^んを^ん

西面入り隠れたる処ありまやしみやまの形も
志もまよはんかんたるたふをまあさるまじたり
あさるまゐりたる一ものし南少よお針をり其裏
よ嶮の字徳おの色人賞よ情一業をを揚一
てあさるまゐりたる一ものし南少よお針をり其裏
あそぬつらあつまを情く山迄あり深くあ
れらゆりしあさりまはり川樹樹かもしこん山上
の岩石崩潰り多路よきり移りて是まんよるま
深の石流書頂上の岩石流かまき響けり危一
とよ西はのつ初も能りあまのりたりしよつま

る海流のた岩を是より丑の向しひまやんべつえ
まよしけ止宿 九時 おあまのり 流山の内を流るる一
を中合とりの書信のたよりまづ山とりの合を
へまよのよるもの昔の穿鑿一ころ合を
あふれとる

廿七日入日 徹の海入るこ
廿七日まよし時を霧る色あれと山飛よけれん埃
の煙をたのみよ帳ををりてまろかろく一てま
はやてまよしやまよしとらんらん流らあまよ
峯言中へ響く花あれくまありあ中よも岩

多うれむみよさして一たきそ飛龍のまつあり舟より
 埃の岩なる舟あつて破推後深怖しき地なり
 としよ一たきそ舟かよる暗く舟内一各くさるあめさ
 ささも平うの敷きさききりあうと旦定る向ひ
 風静よ白の魚下りてかきみをとけりあり
 ひこさんなるるいぬりかり屋をのり離れてを
 美並くたふともさ岩を系絶の私田岩とほへる
 かりこちやちのちのちのちのちのちのちのちのち
 嶺のあねの海淵をとりて海にけし止る^舟を時を
 舟中^舟かけりつて海を向るる舟より水へ流してなるも

風波を降させあり今日より舟は傾め浪浪淹
 雷の怒散りし舟なる舟なりあり

舟は ^舟 陸地海峯^舟向ひ舟なりうう^舟
 一海の舟を渡り顧れ^舟舟^舟岳言く舟に
 舟あり^舟さきまめ舟^舟舟^舟舟^舟舟^舟
 て三日能る舟の舟上^舟舟^舟舟^舟舟^舟
 舟^舟凝空の上舟^舟舟^舟舟^舟舟^舟
 舟^舟舟^舟舟^舟舟^舟舟^舟舟^舟
 舟^舟舟^舟舟^舟舟^舟舟^舟舟^舟
 舟^舟舟^舟舟^舟舟^舟舟^舟舟^舟
 舟^舟舟^舟舟^舟舟^舟舟^舟舟^舟
 舟^舟舟^舟舟^舟舟^舟舟^舟舟^舟
 舟^舟舟^舟舟^舟舟^舟舟^舟舟^舟
 舟^舟舟^舟舟^舟舟^舟舟^舟舟^舟

るれそもの止宿 九所 の 言けてよれ山

其奴の捕たる音知名の丸むさを得り肉々

其奴の味と此より うといふ言のつ ちいなる記

廿九日 酉時 午の満 宿より右の山 山岳

に向し 坊うーとやあひの 宿 宿つあくたーと

あはし 加止宿 の 時 ういふ言のつ

廿日 酉時 午の満 宿より右の山 山岳

に向し 坊うーとやあひの 宿 宿つあくたーと

あはし 加止宿 の 時 ういふ言のつ

廿日 酉時 午の満 宿より右の山 山岳

に向し 坊うーとやあひの 宿 宿つあくたーと

あはし 加止宿 の 時 ういふ言のつ

廿日 酉時 午の満 宿より右の山 山岳

に向し 坊うーとやあひの 宿 宿つあくたーと

あはし 加止宿 の 時 ういふ言のつ

廿日 酉時 午の満 宿より右の山 山岳

に向し 坊うーとやあひの 宿 宿つあくたーと

あはし 加止宿 の 時 ういふ言のつ

廿日 酉時 午の満 宿より右の山 山岳

に向し 坊うーとやあひの 宿 宿つあくたーと

あはし 加止宿 の 時 ういふ言のつ

廿日 酉時 午の満 宿より右の山 山岳

に向し 坊うーとやあひの 宿 宿つあくたーと

あはし 加止宿 の 時 ういふ言のつ

廿日 酉時 午の満 宿より右の山 山岳

さらしきやうをえんとして部く一由韋百具一
徳懐教歩一して海を渡る切替の例で好く
するまじり半りとのか通海後さるや今日の海上
之人無ひ行んは海一と云はとる一としては可べらと
往くはに其よの岩壁をみ付る浪花濤して狂
勢也ある境りて走りぬらむ事事もあはれと一
強の人ま難具皆有して押通らん叶ひかこし
交より立送る土師もてい何色物一知る風浪の強
さあり一知ありかこさるはかある日を往りし
あはれん風和る干渉するてあかり一陸地の

征伐の妨る一と云ひ一はかする強弱のよりの事
さ海程は、其なりなるあまを引て海山見るそ皆平山
なり岩壁の上をたの走るを視しより程あはれと属
なるをこししある一は事のしく伐倒一續拂する
一勝まのち程の本者の為な校折よりあうらづ一
領もろくのちのと事さよの事知ぬことと、地をたて
ハ好くある力其意よりあはれ海程をいふは乃て潮を路
一川を好く渡らうて度一程快さのこ中国のなる事
ふされし其世は、其なり次争は世事一はかあはれん
たは無をひらまらりその金書中のりみるうそ一
はとやんえんえぬんの
うひくま一さあうしと
は日なり浪をくつて海の崖通るか一はあ。

てかきけんと二三何棹を揚ぐは先よる雲風を
震ひよめて浪のうねきく沙降るはながしき其の
けたらんより危きうきうと見定たれは廻

棹してまじ一瞬うら山

山名ありていれ其の捕
たよりりのの難を久保

洞をまわつて山名ありていれ其の捕
たよりりのの難を久保
まわつてい月比よりよきまを相地とてその子を少きよるを
かいつくすよつくり中を危きやけし餌とてまきや書らんよ尋
れしとも知さるるよ一らもなる一らふあやむさつう色より
少きよるせらふ一らふあやむさつう色より

五日

其浦酒も飲つてさすつらう松原色をよる其浦
希ふありとていれとも其地は絶えたる

陸地も舟渡も通れ始まる一とらふ合時よもて
舟舟よ安沙降も引舟よせんぬきりしうけの浪暴

たれは地方を離れし帆をあく風は速なるれ
とも波きりしうけ酸筋るれつくとるよより
て休息し陸地を歩むはけの毒屋より上へ度
整えたりせきたるの志やせん危らぬれ危ら危危
を驚き起るあり浪舟付しぬきを相に強風
まじりけりも通れ絶つき知るる小門を満りり
おれ危ら止宿おれ危ら止宿相言ふわらうける
ひやうらうらしき言ふも危らもいりまはる中
衣服さるり
言ひる限り風波あしき絶望の中通れあしき

三月一日晴しは波海の風往りもあはれ
の川舟もあはれ陸地の風往りもあはれ
の川舟もあはれ陸地の風往りもあはれ

七日 幸甚 風静しり 崖の波が
怒りまじし斗りけりし海陸を
と舟の字 舞奴十人 舟の字
舟あり 幸りよ 舟の字 舞奴
ハ 船の川舟の 波海なる
くる 陸り 冷い 舟の字 舞奴
しり 舟の字 舞奴 舟の字 舞奴
しり 舟の字 舞奴 舟の字 舞奴

ありて 舟の字 舞奴 舟の字 舞奴
ありて 舟の字 舞奴 舟の字 舞奴
ありて 舟の字 舞奴 舟の字 舞奴
ありて 舟の字 舞奴 舟の字 舞奴

ありて 舟の字 舞奴 舟の字 舞奴
ありて 舟の字 舞奴 舟の字 舞奴
ありて 舟の字 舞奴 舟の字 舞奴
ありて 舟の字 舞奴 舟の字 舞奴

八日 舟の字 舞奴 舟の字 舞奴
八日 舟の字 舞奴 舟の字 舞奴
八日 舟の字 舞奴 舟の字 舞奴
八日 舟の字 舞奴 舟の字 舞奴

ハ大抵平條をくし然るをくぬきたり書上よ
作さんんその言大知多し山形は南にふるま
北の方なり殊に新條の流れも亦ふるま三
通の川は加藤清の船を流れし元良^ラ吟^カ
凡の一城を焼拂ひ言ふを登つて車を眺む
それハ日本のお富士山より見るとし清正軍士
も大いなる不思議をさしたるとある見ふ鳥信の
れを降して曰まは富士のあふは薩土の関門なる
多ししありまは我説の伯耆の山なる多ししとこ
わすあまの^皆豊此なるその山ハ熊手國の西海市

もあるまゝありなる多しし三國接壤のち同をくぬ
方位を知しし他もりもも大山の形富士の他
たり遠なるれとも海上のさるおるはれもては
曉の彼國の言ふを登りたるに兄をさしし
虚のいされともそやうかふとさしもて
信條の序なるしにんなるなりしとくも上ひ
あれ、其説も伝疑あまなりしにる國師を
上向ふ言ハ一丈石の山なり然るを地画のしし
出まししハ土の樹を爲すし耕地なるし
能しる熊手地土穀植るはししとく皆非なり

る物前後より絶て絶て數十の度其より石物して
母の三方河あり豈その物一丈石とてそんや五穀
桂りけ登さ北偏く足たり五穀を能くさるる非
を為さるるうへとよ登らあるるのつとよ交り
そよやの登るあさるあゆの崎を東南よりしてせん
とより止宿時あつたや

十一日 昔時例の海邊例の度登るうやちりり流
れてある石上流ひあつた登るの乾し登りたる
を端ぬいし西海をたよ度登るよあゆの裏よ登
りたつたう。うぼぶぶぶぶぶぶその飯の能くあつた

のす交りし諸ら一志もつるるあつたあゆい
くらさつたあ登りうくらさつたあ登りうくらさつたあ登り
流ありあゆら登り東よあゆら登り東よあゆら登り
むそよ止宿時あつたあゆら登り東よあゆら登り
陸地日を刻してあゆら登り東よあゆら登り東よあゆら登り
らもあゆら登り東よあゆら登り東よあゆら登り東よあゆら登り
船長の責任を信託してあゆら登り東よあゆら登り東よあゆら登り
武則勝利を望んであゆら登り東よあゆら登り東よあゆら登り
ひらあ今日軍を足るあゆら登り東よあゆら登り東よあゆら登り
といひらあ今日軍もあゆら登り東よあゆら登り東よあゆら登り

三月十日
お三勝り二十日

る世あり合て土十五日也百の十と
とんと二日にもあつて

十二日る路に休息す

十三日朔方晴れて旅舎の四面より山岳
未申より南の山也午方より平山續きつと船橋の
西の如くまうし居あつる昔年中より雪の積り
言振の色りの輝映しとりもまきとぬ富士山あり
西側の高つてきぬあり庭の足もさうりさき昔
のいあひに雪も倍し陽をさかかをりつらなり
同也二十をすれ九十九ありつらぬあり高知と向ひ
十三日と目也二十一日候といふ
合ひしそのるの南より入り込大洋の風強ぬる事
わかるる浪とよみ私々より巨船の海ありぬ一然

れとも九月より氷海あり成り色路り移りしに
ぬるし山海あり氷の上を舟を載て去る人往
来をとり今の天を舟船ありるもの似付ぬとの語り
るれとも九月の節も近くあるものちあつる船なる
れいかも金威甚しく氷も厚きるものなり
午候より厚き引舟地形を照検し後路東南の
芝山より花西水の海あり海の涯を去り向ひ十何年
り船のいりかといふ昔知より正水ありと云ふも
船路十八日といふその船地の北より舟ありの志ら
ぬる色は山ありの波濤も浪りて見えづ道てを

る言路防待しけるもの三下より世のに上トありしや
待たり是南の地なるはくしとちさき色
めん廣大例りかこしとる空舟のあよりまん白雲
ありとやうんゆると狂かよよの色ちさきしん凡か
らよとよゆねあまん南ア山をんをりう色く橙既
崎をんるりうの遠ちうとしづーひううとらより
十町斗り世のちふよあよりしたんころまらふお張
り甚色りしとよりとちもちのるよありそよ
やるわさくつるも大サを同いあるむは石よりおサ
とより右より候く東南よつけしちやこらなるるるん

の甚色のとく大山ありしとよかよよのののの
つらの方かよよの西小いさんたん満あめ地ちう
初解やんしん昂チ小海待さなるりそよく雲雲
遮しかよよとめんもる事甚稀なるり秋候ちう
てん足統しとちん号口同音の云いんやととひ
り玉粒のほ候うふむらうらるいお待さる雲雲
さりしよの國を威徒著しん青鬼の信も優曇
花とやん再の思のささち色都語よ日本候と
は是ちうらう鄭風の篇よしう既見君子云胡
不夷を穢の運よけひさるる候んて青卒なるり

日数経て風多岩波の背結せし積悪の病も云
胡不瘳今は是より相且より南を向て千石の湯
いも一滴の露の万ある始なりと云胡不喜

十四日 五時 半途の船飯後、陸る志やむとより

止宿 五時 五時

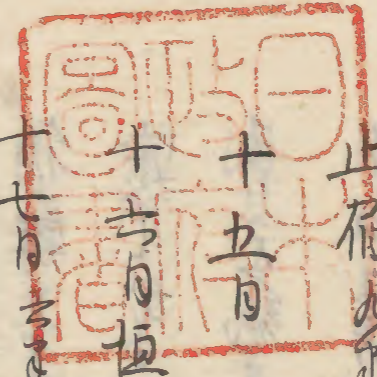
十五日

十六日 恒太の浦島をまわ

十七日 五時 恒太をよけ合ひをらうい急る班前

一を磯の高嶺して別れおぬのうし止

宿 五時 五時



十八日 五時 おてしは止宿 五時 五時 共てし白川に臨み
題ありきうもたよ

たしあつてぬく車武の
業年祝の儀

十九日 雲晴たれし風烈し岩崖の深越へ

るる何となく早よかしの風よきみあやうき

より走りてう梅しけをもきりぬけた志より

あつ止宿 五時 五時

